

駿河忠長卿附屬諸士姓名
駿河在番大御番姓名

寛永九年

十月十二日 駿河大納言忠長卿へ 上使として

内藤伊賀守忠重牧野内匠頭信成井上筑後守

正重甲府に趣く又忠長卿の御家老朝倉筑後守

宣正に奉書を賜り彼地に往きて 上使を待請

へきのむねなりければ宣正直に駿府を發し

て甲州に駆せて三使を待つしかるに 上使三人程な

く甲府に至り 台命を 忠長卿に告て曰甲府

は江戸より遠路を隔て保養自由なるましけ

れは安藤右京進重長か居城上州の高崎の城に

移り給ひて病氣をとくと療治せらるへきと

なり 忠長卿 鈞命を承りて頓て甲府を

發駕し給ひ上州の高崎にこそは趣き給ひ

けれ此時 上使の輩前後を警衛して高崎に

従ひ奉つる 忠長卿には寵臣永井主膳矢部

八左衛門椿井権之助をはじめ其餘近習の侍少し

はかりにて僅に持鎧老本字十文 勝山と号したる

自比秘藏の馬一疋をのみ引具し給ふ朝倉筑後守

宣正は武州の府中まで従ひまゐらせけるか此所

より御暇を告て夫より脇道を経て江戸に帰りけ

る宣正かこころのうち押はかれてあはれなり

忠長卿の封地駿河甲斐遠江の三ヶ国を没収せら

るるか故に永井信濃守尚政松平右衛門太夫正綱

台命を奉り日あらすして江戸を發し先駿

州に趣き国中の事とも沙汰し畢り扱遠州

にうち越へて制令をしめすに残る所なし横目には

川口茂右衛門宗重を副られる松平大膳亮忠

重秋田河内守俊季新庄越前守直好の輩もとも

に往きて駿府の城を請取城番をつとめ翌西年

の春にいたりて江戸になん帰りける諸道具奉行

長崎半左衛門元通佐藤勘右衛門忠次を召して駿

府の町司を 命せられ是迄の門奈助左衛門野邊

六左衛門夏目源左衛門等にかはらしめ給ふ
本多下総守俊次と丹羽式部少輔氏信は在邑たり
けるか奉書をして 鈞命傳りければたちちに

在所を出て遠州に來り永井信濃守か指揮に

従ひ朝倉筑後守か遠州掛川の城を請取て在

番をつとむ

北條出羽守氏重もまた在邑にありけるか奉書を

賜ふてより駿州にいたり田中の城を守衛せり

廿三日 青山大藏少輔幸成 上使を命せられ甲

州に趣き 忠長卿の老臣等に 鈞旨をつとふ

伊奈半十郎忠治に甲州の租税の事を司とらし

め甲府の城番として水野監物忠善大久保玄蕃

頭忠成横目には永田勝左衛門重直各ともに江戸

を發足し月を越し甲府にこそは着にけれ

斯てそ 上使青山大藏少輔幸成 鈞旨を甲

府の老臣等に告ければ屋代越中守忠正來會の

人々に向ひて 大納言殿の居城ともいふへきを

草深にして渡せることは今さらには是非なくも

本意ならぬことなりと懐のやるかたなくそ云ひ出

しにける其席につらなれる人々しはらく何の

いらへもなかりける時に水野監物忠善いまた

年若きものなりけるか座を立て屋代か

傍に近く進みよりて云ひけるやうはいかにも其

こころあらんならば同意の人々をあつめて

城に籠られよかし即時を移さすして城を

踏潰し乗とらんものをと其詞のほどあら

あらしくそ聞えたりける屋代も水野かその

言のあらしきにこころうく思ひ侍りてひとつ

ふたつといひつつけたるにそことなる事

の起りてはせんなき事ならめと席に有

ける人々押とめけり扱其月の五日にもなり

ければ屋代かほからひにて是まで城にありつ

る人々上となく下となく男女打交り或は老た

るもありあるいは若きありおのおのたたた城を

出て皆々城を出たるにそ暇を告へきかた

もなく所縁知音を心當にちりゆくてい袖ひ
ちてこそ見えにけれ本堂伊勢守茂親設案

甚三郎貞辰とは此月朔日に甲州郡内の城を

請取また鳥居士佐守か同州谷村の城を請取

りて在番せり 忠長卿に仕ふまつる人々の

中にも 幕府より附屬せるの輩は武藏

相模伊豆の三つの国のうちに其身を退けて

御下知を待へしとの事なりければその所縁

を求めてひそまりてそ居たりける是をその

ころ東はらひとそいひあへりける又

忠長卿自分に扶持せらるる所の諸侍は荒井の

関所を際りて西の方に追逐せられてけり

是をのちに西はらひとそ云ひにける各其姓

名を爰に記すといへとも三つのひとつにそあ

るへき

駿河大納言忠長卿附屬之輩

三万七千石

御家老

朝倉筑後守宣正

寛永九年壬申の十一月御落去のとき本多中務大
輔に預らる同十四年丑二月六日に卒す

三万五千石

御家老

鳥居士佐守成行

寛永九年壬申の冬松平長門守に預られ長州に
配せらるの處同十四年丑七月十四日卒す

老万五千石

三枝伊豆守守昌

寛永九年壬申の冬内藤豊前守に預られ奥州棚倉
にてきせらる同十三年 恩免を蒙り同十五年老
万石の地を賜はる

老万石

興津河内守直正

寛永九年壬申の冬奥州の津軽に論せられ配所に
て自害し畢

老万石

屋代越中守忠正

寛永九年壬申の冬牧野飛騨守に預られ配所に至ると
いへとも同十五年二月八日 恩免を蒙り房州にて老万石
を賜はる

三千石

御用人

内藤仁兵衛正吉

寛永九年壬申の十一月に預らるといへとも其後恩免を蒙り万治二年亥五月二十六日に死す

三千石 御用人 大久保将監忠尚

寛永九年壬申の十一月に預らる其後息源五兵衛は淺野内匠頭か家に仕ふ

三千石 御用人 戸田半平

寛永九年壬申の十一月に預らる

六千石 大番頭 渡邊監物忠

寛永九年壬申の十一月に預らるによつて大関土佐守か臣に配せられ承應二巳年六月廿四日大関家に賜はる

三千石 大番頭 松平孝岐守正朝

寛永九年壬申の十一月に水谷伊勢守に預られ常州下館に配せらるといへとも同十二年 恩免を蒙りて後水戸家に仕ふ

二千石 大番頭 松平志摩守重成

寛永九年壬申十一月西尾丹後守に預られ常州土浦に謫せらる同十二亥正月 恩免を蒙りてのち水戸家に仕ふ

三千八十四石 日向半兵衛正久

寛永九年壬申の冬蟄居すといへとも同十一年甲戌の冬召出され本知を賜はる

二千石 依田肥前守信政

寛永九年壬申の冬蟄居すといへとも同十一年におよひ召出され本知を賜はる

二千石 惣御代官 村上三右衛門吉正

寛永九年壬申の冬蟄居すといへとも同十一年におよひ恩免を蒙る

三千石 神社奉行 榊原大内蔵

二千石 神社奉行 野田奎頭

榊原野田ともに寛永九年壬申の冬あざけらるいまた恩免を蒙らざる内に死す

三千石 有馬加賀守頼次

寛永九年壬申の冬筑後の国久留米に蟄居せりしかるに同十三年 恩免を蒙り江府に来る

二千石 松平因幡守忠久

寛永九年壬申十一月諭せられ寛文七年丁未七月二十日 恩免を蒙り江府に來り同十二月長男主水に五百俵を賜はる

二千石 花畑番頭 矢部八左衛門

寛永九年壬申十月上州高崎にひて逝去の後つひに配所に謫せらる未考

高不知 花畑番頭 永井主膳

寛永九年壬申十月上州高崎に従ひ逝去の後配せらる

千二百石 花畑番頭 椿井権之助正次

寛永九年壬申十月上州高崎に従ひ逝去の後稲葉丹後守に預られ常州柿岡に配せられ同十四年に恩免を蒙る

八百石 花畑番頭 太田善右衛門盛信

寛永九年壬申十一月稲葉丹後守に預られ常州柿岡に配せられ同十四年に 恩免を蒙り後に 櫻田御殿に仕ふ

千石 御小姓御鷹頭 加藤新太郎

寛永九年の冬上州高崎に従ひ奉り逝去の後預られ配所に於て死す

五百石 御鷹頭 長田十太夫重政

寛永九年壬申十一月永井信濃守に預らる同十三年召出され本知を賜はる

千石 山田清太夫重次

始め町司を務むといへとも辞して寛永九年壬申の冬蟄居せしむ無幾程して本知を賜はる

四百石 駿府町奉行 門奈助左衛門宗勝

寛永九年壬申十一月に蟄居せしか無幾程して恩免を蒙る

八百石 駿府町奉行 野邊六左衛門當明

寛永九年壬申の冬逝去の後采邑を放され追逐せらる

七百石 駿府町奉行 夏目源左衛門

寛永九年壬申の冬に采地を放され追逐せらる

千石 御馬預 荒木十左衛門元政

寛永九年壬申十一月松平出羽守に預られ信州川中嶋に配せらる後 恩免を蒙りて本知を賜はる

千石 小姓 諏訪左門頼長

寛永九年壬申の冬信州高崎に蟄居すといへとも同十三年十二月召出され年俵千俵を賜ふ

高不知 嶋 志摩守

寛永九年壬申の冬采地を没収せらる

高不知 岡嶋内膳

高不知 松野主馬

高不知 目付 小栗頼母

寛永九年壬申の冬岡嶋松野小栗ともに蟄居或は預らるといへとも未考

千石 目付 大井新右衛門

寛永九年壬申の冬蟄居せり無幾程して恩免を蒙り本知を賜はる

五百石 目付 河野庄右衛門照盛

寛永九年壬申十一月松平石見守に預られ播州佐用に謫せらる

高不知 書院番 河野庄大夫通良

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十三年父とともに恩免を蒙り父庄右衛門か本知五百石を賜り大御番に加はる

四百石 目付 森川助右衛門長俊

寛永九年壬申十一月片桐出雲守に預らるといへとも同十四年に 恩免を蒙り御小姓組にいりて本知を賜はる

四百石 目付 宮城平右衛門正業

寛永九年壬申十一月松平右近大夫に預られ播州明石に謫せらる同十一年甲戌正月六日配所にて死す

高不知 書院番 宮城五郎右衛門政次

寛永九年壬申の冬蟄居せしか父平右衛門配所にて死去後同十三年壬申 恩免あり御小姓組に入て父の本知を賜はる

七百石 高木弥右衛門

寛永九年壬申十一月蟄居せり然るに同十一戌年 恩免を蒙り本知を賜はる

七百石 平岩七之助

寛永九年壬申十一月預らるといへとも 恩免を蒙るの後水府君に仕ふ

七百石 鈴木奎之助重利

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十年に月俸四十人扶持を賜ふ同十六卯年八月二十五日に死す

無足 鈴木八郎右衛門

寛永十六卯年父奎助死去の後 召出され同二十年末の十二月甲州にて二百石の地を賜はる

高不知 松平新助義勝

書院番

松平作左衛門勝吉

高不知 平林勘次郎

高不知 本多三右衛門

高不知 大岡求馬助

松平新助より大岡求馬助に至りて五人の輩或は蟄居或は追逐となるへけれども未考

七百石 平尾伊織

書院番

寛永九年壬申の冬蟄居せりそのち 恩免を蒙りてのち武州八王子に於て死去嗣子依田左近に本知を賜はる

六百五十石 花村三郎兵衛正吉

寛永九年壬申十一月蟄居せしか同十一年戊十一月五日に死す子孫 神田御殿に 召出さる

六百石 伊東右馬允政勝

寛永九年壬申十一月松平土佐守に預られ土州に譲せらる同十三年 恩免ありて本知を賜はる

二百七十二石 廣澤五左衛門

寛永九年壬申十一月水野日向守に預らるの處 正保五年戊子六月に配所にて死す

五百石 松崎善右衛門吉久

納戸頭

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十三年 恩免を蒙り同十五寅年本知五百石を賜はる

五百石 松崎権左衛門吉次

納戸頭

寛永九年壬申十一月蟄居せり同十三年 恩免を蒙り同十五寅年御小姓組に列し本知を賜はる

二百石 松崎四平吉雅

書院番

寛永九年壬申十一月大久保出羽守に預られ武州木西領に蟄居して終に死す

五百石 筒井七郎左衛門

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十一甲戌年十二月に本知を賜はり大御番に入る

五百石 本多四郎左衛門貞吉

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十一甲戌年に 恩免を蒙り大御番に 召出され本知を賜はる

四百石 牛込三右衛門俊重

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十一年甲戌十二月に本知を賜御小姓組に入

四百石 森川善太夫

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十一年に本知を賜りて 召出さる

三百五十石 櫻井八右衛門正松

寛永九年壬申十一月蟄居すといへとも同十一戌年本知を賜はる

二百石 逸見市之丞義長

寛永九年壬申の冬蟄居すといへとも同十一戌年十二月に本知を賜はる

六百石 佐野半左衛門政一

寛永九年壬申の冬蟄居せしかとも同十三年 恩免を蒙りて御小姓組に入りて本知を賜はる

三百石 土岐縫殿助頼泰

寛永九年壬申の冬蟄居せしかとも同十三年 恩免を蒙りて御書院番に入り本知を賜はる

二百石 黒田六兵衛由政

寛永九年壬申の冬蟄居せしかとも同十一戌年十二月 召出され大御番に入り本知を賜はる

五百石 三枝平右衛門守光

寛永九年壬申の冬蟄居すといへとも同十三年 召出され大御番に入り本知を賜はる

二百石 三枝喜内守次

寛永九年壬申の冬蟄居せしむといへとも同十三年 恩免を蒙り無幾程死す

二百石 三枝七内守重

寛永九年壬申十一月采色を放され卒に采色を賜ふことなくして死す

五百石 三枝平六郎守知

寛永九年壬申の冬蟄居せり無幾程して 恩免ありて四百石の地を賜はる

五百石 水野内記勝信

寛永九年壬申の冬蟄居せり其後 恩免を蒙り 水野日向守か家に仕ふ

二百五十石 富田與右衛門兼久

寛永九年壬申の冬蟄居せり其後 恩免を蒙り 同二十年に大御番に入りて本知を賜はる

二百石 秩父彦兵衛重吉

寛永九年壬申十一月蟄居せりそのち月俸を賜り 同十一甲戌年 召して本知を賜はる

五百石 稲葉内記正利

寛永九年壬申の冬蟄居せり其後 恩免を蒙り 後に細川越中守に仕ふ

四百石 小林左次兵衛重勝

寛永九年壬申の冬井上河内守に預られ遠州濱松に謫す同十三年九月十七日 恩免を蒙り 本知を賜はる

三百石 櫻井市右衛門信利

寛永九年壬申十一月蟄居すといへとも同十一戌年に 召して大御番青山因幡守か組にいり本知を賜はる

高不知 堀勘兵衛三政

寛永九年壬申の冬野州烏山に蟄居せり

六百石 近藤五左衛門正次

寛永九年壬申十一月に蟄居せしかとも同十一戌年の冬 恩免を蒙り同十五年に死す

二百石 近藤八兵衛正勝

寛永九年壬申の冬蟄居せるといへとも同十一戌年父とともに恩免を蒙り二百石の地を賜はる

四百石 朝比奈吉兵衛真照

寛永九年壬申の冬蟄居せり無幾程 召出されて 御小姓組に入り本知を賜はる

三百石 飯河善左衛門

小十人頭

寛永九年壬申十一月蟄居せしかとも同十一年戌十二月召して本知を賜り大御番となる

三百石 小十人頭 鈴木八兵衛信吉

寛永九年壬申の冬蟄居せしかとも同十二年召して大御番晋川山城守組にいり同十二月廿二日本知を賜はる

四百石 使役 細井金大夫

寛永九年壬申の冬佐竹修理大夫に預らる羽州に遷る承應二年巳六月二十四日佐竹氏に賜はる

三百石 八木宮内

寛永九年壬申の冬預らるといへとも寛文四甲辰年七月廿四日に 恩免を蒙り同十二月二十七日三白俵を賜はる

四百二十石 大番 大井茂太夫

寛永九年壬申の冬蟄居せり無幾程 召出され長男小兵衛に本知を賜り御廣敷番に 命せらる

三百石 大番 大井長右衛門正永

寛永九年壬申の冬武州秩父郡小川邑に蟄居する事五ヶ年そのうち十人扶持を賜り同十五年に本知を賜はる

四百石 朝比奈六左衛門昌行

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十一年甲戌の冬 恩免を蒙り大御番に入て本知を賜はる

四百石 花畑番 依田小隼人貞清

寛永九年壬申の冬蟄居せりのち程なく 恩免あり同十九年十二月本知を賜はる

二百五十石 大番 依田彦左衛門信吉

寛永九年壬申の冬蟄居せしかとも無程 恩免を蒙り子息権兵衛に本知を賜り御廣敷番に命せらる

百五十石 大番 依田甚五左衛門守秀

寛永九年壬申十一月に蟄居せりそののち 召して本知を賜り同十六年に御天守番となる

三百五十石 花畑番 伴野九左衛門貞昌

寛永九年壬申の冬蟄居せしかとも無幾程して 召出され本知を賜はる

四百石 伊丹弥五右衛門

寛永九年壬申の冬蟄居せしかとも幾程なくして 召出され本知を賜り大御番にいる

二百石 青沼七左衛門

寛永九年壬申の冬追逐せられて無幾程死去せり男子なくれば断絶となる

百五十石 書院番 依田友之助

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十三年に 召出され本知を賜り御小姓組藤原藤探津守か組となる

三百石 花畑番 多門権九郎

寛永九年壬申の冬蟄居せりそののち 恩免を蒙れとも病によつて不仕

二百石 花畑番 多門平兵衛正信

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十一月戌年十二月に 召して二百俵を賜り大御番に入る

三百石 駒井治兵衛

寛永九年壬申の十一月蟄居せり然れとも無幾程して 恩免なり本知を賜はる

三百石 松下忠兵衛

高不知 加藤五郎左衛門

高不知 坂本権十郎

三百石 書院番 森山市兵衛

寛永九年壬申の冬松下加藤坂本の三人蟄居するか末考

三百石 花畑番 宮城半助貞正

寛永九年壬申の冬蟄居すといへとも同十三年に 恩免を蒙り同十五寅年御小姓組に入り本知を賜はる

三百石 使役 高尾勘右衛門

寛永九年壬申の冬蟄居すといへとも無幾程して 召出され本知を賜はる

三百石 書院番 玉虫次郎右衛門俊茂

寛永九年壬申の冬蟄居せしか同十六年に 召出され大御番となり本知を賜はる

三百俵 花畑番 中根五兵衛

寛永九年壬申の冬蟄居なれとも同十三年に 恩免を蒙り同十五寅年年俵三百俵を賜はる

三百石 郡奉行 中島十右衛門盛澄

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十一月戌年の十二月に 召して本知を賜り大御番となる

三百石 納戸 山中市郎右衛門元吉

寛永九年壬申の冬蟄居せりそののち 召出され本知を賜り大御番となる

三百石 納戸 黒田内蔵助忠光

寛永九年壬申十一月食邑を放され追逐せらる子孫に及びて神田御殿に仕ふ

四百三十石 武川者 伊藤新五左衛門重昌

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十四年月俵を賜り同十七年辰十月御宝藏番となり同十八巳年本知を賜はる

三百九十六石余 武川者 山寺甚左衛門信光

寛永十四年月俵を賜り同十七年辰十月 召して御寶藏番となり同十八巳年十二月に本知を賜はる

三百六十石 武川者 小尾彦左衛門重正

寛永九年壬申十一月蟄居せりそののち 召して本知を賜はる

三百六十石 武川者 青木弥七郎信就

寛永九年壬申の冬蟄居同十四年月俵を賜りてそののち同十九年に至つて甲州の本知を賜はる

二百九十俵 武川者 青木清左衛門

寛永九年壬申の冬蟄居して月俵を賜ふそののち同十六知年本知を賜り同十七辰年御宝藏番となる

二百石 武川者 折井仁左衛門次吉

寛永十四年月俵を賜り同十七年辰七月 召して御宝藏番にいりて同十八年巳十二月本知を賜はる

二百九十石 武川者 米倉嘉左衛門

寛永十年西蟄居して月俵を賜り同十七辰年 召して御宝藏となり同十八巳年本知を賜はる

二百十三石 武川者 米倉左太夫

寛永十百年月俸を賜り同十七年 召して御宝蔵番となり同十八巳年本知を賜はる

三百石 武者 山高三左衛門信俊

寛永九年壬申の冬蟄居せりそのち 恩免を蒙りて大御番に命せられ同十九年十二月本知を賜はる

二百七十五石 武者 山高孫兵衛親重

寛永九年壬申の冬蟄居せりそのち 恩免を蒙りて大御番に列せられ同十九年十二月に本知を賜はる

二百三十石 武者 曲瀨勝左衛門正次

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十四年に月俸を賜り同十三年二月二十六日死す

無足 武者 曲瀨彦助正長

寛永十三年の春父勝左衛門死去せしかは月俸を賜はり其後大御番に列して父の本知を賜はる

二百三十石 武者 柳沢孫左衛門安吉

寛永十四年より月俸を賜はり同十七辰年に御宝蔵番となり同十八巳年本知を賜はる

百六十石 武者 柳沢十右衛門安忠

寛永十年より月俸を賜はり同十七辰年に本知を賜はる

武者 馬場次郎兵衛

寛永十年より月俸を賜はり同十七辰年に蔵番にいり同十八巳年十一月十五日に本知を賜はる

二百七十二石 武者 津金又十郎

寛永十四年より月俸を賜はり其後 召出されて同十九年本知を賜はる

三百二十石 武者 葛木新八郎盛時

寛永九年壬申の冬蟄居して月俸を賜り其後 召て大御番に入り同十九年本知を賜はる

三百石 大御番組頭 加藤傳兵衛正信

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十一寅年 恩免を蒙り同十三年本知を賜はる

三百石 大御番組頭 佐橋儀左衛門吉堅

寛永九年壬申の冬蟄居せり同十一寅年に

恩免を蒙り同十三年本知を賜はる

三百石 大御番組頭 戸田小平次正次

寛永十四年六月より月俸を賜り同十一寅年十一月に 召して大御番内藤石見守か組に列せられ同十二年本知を賜はる

三百石 大御番組頭 仙波太郎兵衛正種

寛永十四年六月より月俸を賜り同十一寅年十月に 召して大御番にいり同十二亥年十二月本知を賜はる

三百石 大御番組頭 小野朝右衛門高寛

寛永十四年六月より月俸を賜はり同十一寅年十一月十一日に 召して大御番に入り同十二亥年十二月本知を賜はる

三百石 大番 野呂彦兵衛守影

寛永九年壬申の冬蟄居せりそのち 召して大御番に入り本知を賜はる

三百石 大番組頭 野呂文太郎直影

寛永九年壬申の冬蟄居せりそのち 召して大御番に入り本知を賜はる

四百石 大番 松井助太夫宗次

寛永十年西六月より月俸を賜りそのち 召て御宝蔵番にいり同十八巳年に本知を賜はる

高不知 森川半右衛門

寛永十年より月俸を賜はり同十七辰年に蔵番にいり同十八巳年十一月十五日に本知を賜はる

高不知 曲瀨縫殿左衛門吉清

二百石 書院番 長塩七右衛門

寛永九年壬申の冬森川曲瀨長塩寛桑嶋の輩あるひは蟄居し或は預らるといへとも末考

高不知 桑嶋惣十郎

寛永九年壬申の冬蟄居せりそのち 無幾程して 召出され本知を賜はる

三百石 書院番 米津才兵衛

寛永十四年六月より月俸を賜り同十一寅年の冬に 召出され大御番に入りて本知を賜はる

高不知 保科源助

寛永九年壬申の冬采邑を放され追逐せられにけりの末考

高不知 廣沢三郎平

寛永九年壬申の冬采邑を放され追逐せられその後若州に往き酒井家に仕ふ

四百石 大番 水野内匠親好

寛永十四年六月より月俸を賜り同十六卯年に 召して御広敷番に列せられ同十七辰年の春本知を賜はる

三百七十七石 大番 加茂宮次兵衛直重

寛永十四年より月俸を賜り同十一寅年に 召して本知を賜はり同十八巳年七月九日に死す

三百七十七石余 川井善兵衛

寛永九年壬申の十一月采邑を放され預らるといへとも程なく 恩免ありて本知を賜はる

三百石 小菅八左衛門正重

寛永九年壬申の冬蟄居せりそのち無幾程して 召出され大御番に列せられ本知を賜はる

三百石 松波市右衛門正友

寛永十四年の夏より月俸を賜り同十一寅年 召出され大御番と成て本知を賜はる

三百石 大番 服部六左衛門

寛永十四年より月俸を賜ふ無幾程して 召出され大御番に列し本知を賜はる

二百七十五石 公事奉行 石原四郎右衛門安昌

寛永九年壬申三月二十三日に死去せり同十年に長男四郎右衛門に月俸を賜り同十九年午年に父の本知を賜はる

三百石 杉原小左衛門元明

寛永十四年六月より月俸を賜りそのち 恩免を蒙る末考

二百七十石 大番 萩原平左衛門忠明

寛永十四年より月俸を賜り同十六卯年に 召出され御廣敷番に 命せられ本知を賜はる

百五十石 大番 萩原善左衛門

寛永十四年より月俸を賜り同十六卯年に

召出され富士見番に列し本知を賜はる

二百石

篠山八郎兵衛資正

二百七十石

大番

石原太郎兵衛吉次

寛永十酉年より月俸を賜りそののち 召出され御廣敷の御番を務め本知を賜り同二十末年三ノ丸に附せらる

二百石

花畑番

丸山文右衛門友次

三百五十石

寛永十酉より月俸を賜りそののち 召出されて本知を賜ふか未考

二百石

寛永九年壬申の冬疊居せり同十七辰年十二月恩免ありて同十八年巳十二月十三日に本知を賜はる

本間十左衛門次年

四百石

同期

土屋好菴虎昌

寛永九年壬申の冬采知を召放され大久保加賀守に預らるそののち配所にて死す

二百石

都筑三四郎

二百石

土屋権四郎

寛永九年壬申の冬疊居せしむといへとも同十一年の冬 召出され大御番に列せられて本知二百石を賜はる

二百石

大番

福井藤十郎

二百石

勝屋勘左衛門正次

寛永九年壬申の冬疊居せりされとも無幾程して 召出され本知を賜はる

二百石

腰物役

大久保茂左衛門忠吉

二百石

三宅与左衛門勝重

寛永九年壬申の冬疊居すといへとも程なく 召出され大御番に入りて本知を賜はる

二百石

腰物役

大久保次郎左衛門忠重

二百石

糟屋與兵衛義成

寛永九年壬申の冬相州に疊居せしかとも無幾程して 召出され大御番に列し本知を賜はる

二百石

腰物役

逸見勘右衛門

二百石

山上五郎三郎正久

寛永九年壬申の冬疊居せりといへとも久しからずして 召出され大御番にいり本知を賜はる

二百石

寛永九年壬申十一月に疊居せしかとも同十一年 召出されて本知を賜はる

江原九郎右衛門信次

二百石

大番

金田忠左衛門正信

寛永九年壬申の冬疊居せしかとも程なくも 召出され大御番松平石見守か部下となり本知を賜はる

二百石

寛永九年壬申の冬疊居せりそののち 召出されて本知を賜はる

小笠原与左衛門貞利

二百石

花畑番

山岡四郎右衛門景廣

寛永九年壬申の冬疊居せりそののち 召出されて大御番に列し本知を賜はる

二百石

寛永九年壬申の冬疊居せり同十一年甲戌の冬 召出されて大御番にいり本知を賜はる

酒井兵四郎正吉

二百石

雨宮宇右衛門

寛永九年壬申の冬武州のうちに疊居せりそののち 召出され本知を賜はると未考

二百石

寛永九年壬申の冬疊居せり翌年より月俸を賜り同十一年甲戌の冬 召出され本知を賜はる

飯室与兵衛

二百石

寛永九年壬申の冬十月二十一日に死去せりこの故に子息傳八郎に月俸を賜りそののち又本知を賜はる 召出され本知を賜はる

中村吉十郎長清

二百石

大番

野呂角兵衛正富

寛永九年壬申の十一月に采知を放され追逐せらる後に恩免を蒙りて万治三年辛丑二月九日江戸に 召れ親族に預らる 神田御殿に仕ふまつる

二百石

鈴木十兵衛

寛永九年壬申十一月秋田氏に預られ三春に配せらるといへとも万治四年辛丑二月九日江戸に 召れ親族に預らる

三百石

右筆

鈴木権兵衛重弘

寛永十酉年六月より月俸を賜り其後 召出され本知を賜りて右筆を勤む

二百石

鈴木九郎右衛門重定

寛永九年壬申の冬疊居せし内同十酉年死す故に幼少の子に月俸を賜はり其後本知を賜はる

二百石

松平傳六郎昌信

寛永九年壬申の冬疊居せるの處翌酉年六月よりして月俸を賜り同十一年に 召出され大御番に入り本知を賜はる

高不知

書院番

松平源左衛門宗治

寛永九年壬申五月十日に死す同年の冬長男作左衛門食録を失ふといへとも後に 神田御殿に仕へて俸禄を賜はる

二百石

代官

大野十右衛門元繼

寛永九年壬申の十一月疊居せりそののち程なく 召出され大御番に入りて本知を賜はる

二百五十俵

代官

岩波七郎右衛門

寛永九年壬申の冬疊居せりそののち程なく 召出され本知を賜はる

二百俵

代官

平岡岡右衛門吉道

寛永九年壬申の冬疊居せりそののち 召出され年俸を賜り御代官に 命せらる

二百俵

書院番

田中又右衛門正重

寛永九年壬申の冬疊居せしかとも同十一年甲戌年の冬 召出され俸二百俵を賜り甲府の御代官を 命せらる

寛永九年壬申の冬蟄居其後の事末考

百二十石 大番 依田五兵衛盛繁

寛永十年酉の六月より月俸を賜りそののち無幾程して 召出され本知を賜はる

百二十石 大番 依田孫市盛吉

寛永十年酉の六月より月俸を賜り同十六卯年に 召出されて本知を賜はる

百二十石 大番 関 孫太郎

寛永十年酉の六月より月俸を賜ふといへともそののちの事末考

百二十石 大番 布下権左衛門

寛永十年酉の六月より月俸を賜ふそののち死す故に息勤兵衛に本知を賜はる

無足 大番 布下勘兵衛

寛永十年酉の六月より父権左衛門とともに月俸を賜ふそののち御天守番に 召出され父の本知を賜はる

百二十石 大番 岩下庄五郎

寛永十年酉の六月より月俸を賜り同十六卯年に至りて御天守番に 召出され本知を賜はる

百二十石 大番 竹田勘右衛門

寛永十年酉六月より蟄居して月俸を賜はりそののち 召出され富士見番となり本知を賜はる

百二十石 大番 清野半右衛門

寛永十年酉六月より蟄居して月俸を賜ふしかるに程なく 召して富士見番を命せられ本知を賜はる

百石 大番 早川五郎右衛門

寛永十年酉六月より月俸を賜ふの後末考

高不知 山縣三郎左衛門

寛永九年壬申の冬十一月に追逐せらるといへともそののち末考

高不知 鷹役 石崎市兵衛

高不知 鷹役 沼野市右衛門

高不知 鷹役 中野久助

寛永九年壬申の冬石崎沼野中野とともに蟄居するの後の事末考

高不知 山名兵庫助

寛永九年壬申の十一月に内藤左馬助に預らる其後万治三年子の十月配所に於て死す

高不知 花畑番 山村五郎左衛門良士

寛永九年壬申の十一月に食禄を放されてのち信州福嶋に蟄居して死す

高不知 書院番 小笠原新兵衛廣信

寛永九年壬申の十一月に食禄を放されてのち沈淪して万治四年辛丑三月死す

高不知 戸田孫四郎

寛永九年壬申の十一月に食禄を放されてのち沈淪して越後中将光長に仕ふ

百石 武者市左衛門

寛永九年壬申の冬十一月に食禄を放され追逐せられけるそののち上州に蟄居して死す

五百石 醫師 内田玄勝法眼千里

寛永九年壬申の冬御落去の後同十年酉の三月 恩免を蒙り本知を賜り官醫に列せらる

八十石 内三十俵 外五人扶持 重田郷助

寛永十年酉の六月より月俸を賜りそののち召出され御天守番となりて本知を賜はる

六十石 内三十俵 外五人扶持 重田平助

寛永十年酉の六月より月俸を賜り同十七年辰の十月御宝蔵番となりて同十八巳年十一月に本知を賜はる

六十石 内三十俵 外五人扶持 重田作兵衛

寛永十年酉の六月より月俸を賜り同十七年辰の十月御宝蔵番となりて同十八巳年十一月に本知を賜はる

八十石 大番 石原八左衛門

寛永十年酉の六月より月俸を賜り同十六卯年富士見番に 召出されて本知を賜はる

九十石 内三十俵 外五人扶持 依田半右衛門

寛永十年酉の六月より月俸を賜りそののち御

宝蔵番に 召出されて本知を賜ふといへとも故有て断絶せり

七十石 内三十俵 外五人扶持 依田勘三郎吉久

寛永十年酉の六月より蟄居のうち月俸を賜りけるその後同二十年未三月十五日に死す

六十八石 内三十俵 外五人扶持 原 太郎兵衛

寛永十年酉の六月より月俸を賜り同十六卯年に 召出され富士見番となり本知を賜はる

六十石 内三十俵 外五人扶持 櫻井九兵衛

寛永十年酉の六月より月俸を賜り同十七年辰の冬富士見番となり本知を賜はる

六十石 内三十俵 外五人扶持 櫻井仁兵衛

寛永十年酉の六月より月俸を賜り同十七年辰十月 召して御宝蔵番となり同十八年巳の十一月に本知を賜はる

六十石 内三十俵 外五人扶持 小林理右衛門

寛永十年酉の六月より月俸を賜り同十七年辰十月 召されて御宝蔵番となり同十八年巳の十一月に本知を賜はる

六十石 内三十俵 外五人扶持 関 孫兵衛

寛永十年酉の六月より月俸を賜りそののち御宝蔵番となりて本知を賜はる

六十石 内三十俵 外五人扶持 高月忠兵衛

寛永十年酉の六月より月俸を賜り同十六卯年富士見の御番に 命せられて本知を賜はる

高不知 鷹役 竹田喜兵衛

百石 小池与兵衛

高不知 工藤弥左衛門

寛永九年壬申の十一月に追逐せらるるのち末考

高不知 書院番 野村七郎兵衛勝章

寛永九年壬申の十一月食禄を放され江戸に来て金杓に居住し其後紀州家に仕ふ

六十石 坂本武太夫

寛永九年壬申の十一月食禄を放され其後甲州に蟄居せしか正保四亥年に九十四才にして死す

高不知 小十人 大森茂兵衛

寛永九年壬申の十一月食禄を放され沈淪せしか
其後水戸家に仕ふ

二百俵 大井理兵衛昌秀

寛永九年壬申の十一月に蟄居せしかとも同十三年
召出され大御番と成て二百俵を賜はる

六十石 小十人 中澤彦右衛門

寛永九年壬申の十一月に食禄を放されて後死す
息權之助事同性源助か願に依て 神田御殿に
召出されける

高不知 川井無手右衛門

寛永九年壬申の十一月に食禄を放され其後中沢
源助か許に寓居して死す

百石 大井権兵衛正守

寛永九年壬申の冬十一月に食禄を放されしかとも其
後御膳方の役に 召出され僅に俸米を賜はる

高不知 一瀬五左衛門

高不知 藤田弥三郎

高不知 横田作之丞

高不知 石田与八郎

高不知 高谷六太夫知真

高不知 神尾喜太夫

高不知 清水八郎右衛門

百石 岩本又次郎

高不知 小田切嘉右衛門

寛永九年壬申の冬食禄を放され沈淪せるか未考

伊藤彦左衛門

稲山清兵衛昌触

高三百石 大御番与頭 秋山伊兵衛政勝

寛永十年西六月より月俸を賜り其後同十三年
本知を賜り大御番に列せらる

高不知 郡司 水上清太夫義長

寛永九年追遂せらるるの後召返されん事を願ひ
居る内死す

稲山六兵衛直祐

寛永十年召返され

榊原又兵衛
加藤吉左衛門

岡村半六

加納勘左衛門

梅沢源助

花塚三郎左衛門

栗村助左衛門

前坂新八

寺田源左衛門

市川勘左衛門

高和金五郎

矢部新八

高須軍平

堀村勘右衛門

寛永九壬申年
十月二十三日

大御番頭松平豊前守勝政を召連駿府の城在番

すへき旨命せられ組の諸士もともに従ひて守る

へきとなり同廿九日に 御前へ召出されて駿府

の御暇を賜ふ時に呉服四羽織一ツを賜りぬ同組頭四人

には呉服と銀子を下され組の諸士に銀子五枚ツツを

賜りける斯てと各駿府に趣き十二月に至り

御城に入りける安西与力鷹匠町与力四十騎を預

られ 御城内にある處大筒石火矢大長鉄炮

ともに二十三挺鉄炮五十挺唐金張七挺合せて八

十挺ことごとく勝政か預りとなる下嶋市兵衛政

真井出十三郎正員をして駿州の御代官を

命せらる翌十年酉の春勝政江戸に召連同六月三

千石の御加増を賜ふ又此比江戸において惣組の諸士に

御加増を賜ふといへとも駿府御番の諸士には其沙汰

もなく駿府に在衛する事既に三年になんおよ

ひけるされとも交替の事沙汰なかりければ心うき事

におもい侍りけるにや議しける様は在番を許され

て江戸に帰らんことを願いたらんに異なる子細も

あるましきにと皆皆此議に走りたれとも中に岡部

小次郎吉次ひとり是をさらに聞きける故に吉

次を除て連署をして遂に江戸にと願ひ出し

ける此こと 御聴にいりたるりける程に務にうみ

たるものねかいかなと 思召にかなはさりけるに

や連署につらなる輩四拾式人みなその食禄を放

され改易にと所せられける岡部小次郎吉次ばかり

は旨はさりけることのみしき事に 思召し給ひ

にけん 召して二百石の地を加へ給ふとなん左に駿府

在衛せる人々のうちに知り得たる名を記す

駿府在番の大御番

松平豊前守組

四百三十石

六百三十五石

組頭 松田市兵衛直長
造営司をつとむ 宅間伊織忠次

松田宅間の両人は改易のうちにいらす

御番之輩

五番組

五百三十石
承應元辰十二月十八日
御免本知を下さる

川井弥作

二百俵

速判にいらさる故に
御加恩を給はる

岡部小次郎

五百五十石
同

大久保金兵衛

二百俵

末考
甲州磐居
慶安三年九月二十九日没

小長谷五兵衛正栄

四百十石一斗三
同

大田次郎右衛門

二百俵

末考
甲州磐居

富田庄之助

四百俵
同

岡部八郎五郎

六百五十石
同

河野源右衛門

三百十石
同

西山長左衛門

四百石
同

林 右馬助

三百八十石
承應元辰十二月十八日
御免本知を下さる

山下又助

三百五十石
同

太田兵五郎

三百四十五石
同

岡部惣六

三百石
同

本多彦兵衛

三百石
同

西尾忠四郎

三百石
末考

美濃部与右衛門

三百石
承應元辰十二月十八日
御免本知を下さる

山田九兵衛

三百俵
同

田村傳右衛門

三百俵
同

石川藤兵衛

三百俵
同

渥美又右衛門

三百俵
同

加藤金内

二百五十石
甲州磐居慶安四年
五月十三日に死せり

大久保源四郎

二百五十石
承應元辰十二月十八日
御免本知を下さる

松田助六郎俊長

二百五十石
同

駒井半七郎

二百十五俵
同

松波三十郎

二百俵
同

中嶋茂兵衛

二百俵
同

三輪小右衛門

二百俵
同

松平六右衛門

二百俵
同

朝比奈治兵衛

二百俵
同

塚原権次郎

二百俵
同

安藤小平次

二百俵
同

本多新十郎

二百俵
同

遠山五郎左衛門

二百俵
同

黒川庄之助

二百俵
同

下山平右衛門

二百俵
同

水野彦九郎

二百俵
同

河野彦太夫